

「シュツツ言語研究ノートにみる〈あなた〉Du-関係と間主観性の問題」

立命館大学大学院博士課程

藤田 寛之

＜報告要旨＞

[本発表の問題意識と目的]

アルフレッド・シュツツは言語のどのような問題圏と関わっていたのか。

たとえば「社会的世界の意味構成」(1932年)においてシュツツは、言語を他者理解における「記号 sign」、「シンボル」といった、フッサール受容による形式論的展開として自—他関係の理解問題のうへで惹起し、それを〈あなた〉体験、〈われわれ〉体験における解釈作用に関わる「言語一般」として取り扱った。また1940年代以後のシュツツを見れば、言語は日常世界の現実あるいは現実的問題として各所に挙げられた継続的な関心対象でもあった(「言語、言語障害および意識の組成」、「シンボル・リアリティ・ソサイエティ」といった諸論文やニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチでの言語社会学の講義など)。

ただし、シュツツにおける「構成」の方法的根拠を理解するうえでは、言語は自—他間関係を構築し、またそれら自身を構成するうえで特殊な権利と地位を与えられた「ある独特なもの」とあるという点を、シュツツのコンテクストにおいて再考しなければならない。というのも1920年代にシュツツは「言語研究ノート Spracharbeit」というスケッチにおいて、「体験」と「概念」から彼の問題関心、すなわち「社会的世界の意味構成」に至る社会科学の哲学的基礎づけについて、カッシーラー、ベルクソン、フッサールといった言語哲学の基礎的アプローチを参照することで、間主観性の問題の枢要に接近するための「言語」の扱いに眼差しを向けていたからである。

そこで本発表は、この「言語研究ノート」におけるシュツツの考察態度を主題に据え、元来からシュツツはいかなる関心のもとで言語というものに対してどのような問題を開示していたか、ということを表すものである。

1. シュッツにおける言語に対する関心

：言語研究ノート Spracharbeit [= Erleben, Sprache und Begriff] に対する見解

はじめに、この言語研究ノートはいったいどのような性格を持っているのだろうか。
本発表の関心に照らし合わせて以下、端的に記す。

[1977年]

H.R.ワグナーはシュッツの1924年からの草稿、すなわちシュッツが「生の諸形式 Life forms」を企図した時期における、ベルクソンの「意識に直接与えられたものについての試論」(1899)から受けた多大な影響を指摘してきた。とりわけワグナーは1925年の言語研究ノート Spracharbeit [I. Teil] = Sinnstrukturen der Sprache について、それが「シュッツがはじめて間主観性理論の描写を試みたもの」であると評価した (Wagner 『The Bergsonian Period of Alfred Schutz』, 「Philosophy and Phenomenological Research」, V.38#2, pp.187-199、[1977])。

またここでワグナーは、シュッツの明証性の出発点はまず社会学的なものであり、またこの立脚点は他のどの経験対象とも異なるものである「あなた Thou の経験科学」を維持していた、と表している (Ibid. p.188)。

[1980年代]

I.スルバール編「生の諸形式の理論 Theorie der Lebensformen (1981年)」において編集された、「体験、言語、概念」のタイトルで知られる言語研究ノートは、スイスにおいて記された1925年 (Spracharbeit [I. Teil]) と1927年 (Spracharbeit [II. Teil]) の数日間に記された51ページに渉る草稿である。今日これは、シュッツが存命中に未発表のままであった初期草稿のうちの一つとして数えられているものである。

とりわけスルバールは、「社会的世界の意味構成」における基礎づけとしての「決してマージナルでない」ベルクソンがシュッツに及ぼした影響関係のうえで、初期草稿の重要性を指摘している (Srubar 「Theorie der Lebensformen」, p.14-15)。そして、言語研究ノートが初期の中でも最も早いうちに計画され、シュッツの中では当時のウイーン学団が考察し、業績としていた言語哲学とはまったく異なった立場に立つ表明だったのである (Ibid. p.17)。

またここで、英語圏向けに紹介されたワグナー編集の手によるシュッツ初期草稿の彼の編集の言を要約すれば、言語研究ノートは次のような位置づけにある (Wagner 編訳「生の諸形式と意味構造 Life Forms and Meaning Structure」, p.125, [1982])。

1. 科学的、哲学的であり、また芸術表現、あるいは物語の基礎となる、一般かつ普遍的なコミュニケーション手段たる日常言語使用を主題としている。
2. シュッツの「生の形式」論の継続した考察。すなわち、a)「行為する私」、b)「語る私」のフレームワーク内における“あなた Du”、そして c)「概念的思考」の度重なる考察である。

3. シュッツは文法形式(採り上げられたのは名詞、形容詞であるが)の考察について現象学的生成を根底に据えることで、経験(体験)の文法形式と間-コミュニケーション的条件をつなぐ文法把握をしている。

[2000年代]

「Alfred Schutz Werkausgabe(=以下「ASW」と記す)」中では、シュッツが抱いた「言語研究 Spracharbeit」は、その当時ウィーンで形成された「論理主義」(新カント主義、ウィーン学団)とは異なった試論であったこと、またシュッツは体験と概念から理解社会学の哲学的基礎づけの調停を行い、ベルクソン、あるいはフッサール、カッシーラー、フンボルトといった言語哲学の基礎的アプローチを参照することで、間主観性問題の解決における見解として「言語の研究」に相對したことを明らかにしている。(Grathoff 他編「ASW. Band V.2」, p.37-38, [2003])

M.パーパーは、シュッツがベルクソンの持続概念の取り込みを計画実践した彼の初期草稿における構想が、シュッツが志向した社会科学の基礎づけの問題のみではなく、「間主観性問題」の解釈における解決の光を照らしていた点において、相互作用と間主観性の領域を意識的に議論の俎上に挙げたことを指摘している。

「シュッツは間主観性のレンズによって、後に主観性へのアプローチとなった「生の諸形式と意味構造」でその立場の態度を陳述する前に、「言語の意味構造(H.R.ワグナーが充てた「Spracharbeit = Sinnstrukturen der Sprache」の訳)」において、あなた Thou 関係と言語を取り扱っていたのである。」(Barber「The participating citizen : a biography of Alfred Schutz」,p.35, [2004])

まず第一に、これまでワグナー、スルバールらによって指摘されてきたシュッツのベルクソンピリオド(受容)としての初期草稿の取り扱いが、シュッツの間主観性理論を基礎づけるうえで主要な性格を帯びてきていることに着目したい。そこで「言語研究」は、間主観性という主題にどのような展開を提示するのであろうか。

さて本発表は、ワグナーによって指摘されたシュッツのフレームワーク〈あなた〉Du と、上述の間主観性理論との分かちがたい関係性について明らかにする事である。つまり「言語研究ノート」という題材は、〈あなた〉Du-関係から間主観的志向へというシュッツの淵源について、彼における言語に対する態度から指摘していく事で、それを豊かにするであろう。

とりわけ、他者との対話状況における「言語行為」は、ウィーンの学問的背景の一つであった「形式論理」とは明らかに異なった試論であり、これは「社会的世界の意味構成」をはじめとする、後のシュッツの「根幹」でもあると言えるのではないだろうか。

[なぜ言語研究ノートか？]

〈あなた〉Du-関係の基底から間主観性の解明へ、これを知る手がかりとしての言語研究ノートに着目する点は、以下のような、近代における言語という問題によって提出された科学方法論的課題に対するシュッツの基礎づけが表された視点を把握できるからである。

1. シュッツが言う構成(世界の意味構成)にとって、言語は「社会的な」発生の問題圏を占めていた、ということ。
2. シュッツが「言語」の研究ノートとしたうえで、世界における他者との関係性を基礎づける間主観性への問いへの探求を構想させるノートであった、ということ。
3. 言語がその重要性にもかかわらず、いかなる「概念」と「形式」の一致と不一致をも含みつつ変化し、矛盾した領域世界であるということ、これらである。

2.シュッツにおける言語(観)批判(1925年)

2-1 体験からの出発

構造主義言語学以前のパラダイムであった、それまでの哲学が自明のものとしていた言語に対する「事物=名」が「世界」に対峙する方法が認識上の概念問題によって前提されている点をシュッツは批判する。またそれは、このような認識のうえに立つ方法論によっても然りであり、シュッツは科学的な考察方法として経験的な命題を打ち立てるのではなく、まず、「私」の「体験」領域の考察によって対象に向かうという、「体験」による「体験」からの考察を自らの試論の基底として設定し、そこから認識可能な一連の法則を秩序付ける態度を構想するのである。

「どの考察も2つのまったく異なった観点から取り組むことができる。一つは、大方概念によって対象を識別し、識別された対象を一つの体系[にもたらすという]、対象の方法的秩序づけの試みである。それは一連の経験命題を立てる試みに連結し、与えられた対象についての経験的命題の総和をもって、その科学の内容となる。自然科学がこれまで唯一の正しい方法としてきたのはこれであり、いわゆる精神科学にもこの考察の仕方が観察される。しかしこの方法とは完全に対立する、もう一つの方法がある。これ(この方法)により一連の現象は、それが科学であると正当に主張しうる、一つの理解可能な連関にもたらされる。したがってこの考察の仕方は、経験による秩序づけを伴うことで世界を概念もしくは表象 *Vorstellung* として把握するのではなく、むしろ世界を理解できる体験としてもつばら受け取り、その体験を全体としての生の経過のうちに組み入れることが、この生の経過それ自体と同じ規則に則り行われる。」

「もちろん、この考察の仕方はあらゆる「認識対象」について可能であるわけではなく、むしろただ件の現象、したがって体験内容が理解可能である現象にのみ許されるべきものである。まさに、経験とはまったく異なる世界の意味の把握を問題として取り扱うのであり、また、この世界の意味は意味を付与されたものとして前提され、所与として受け取られている経験の諸事実は親しみ得ないし、また親しむべきも

のではない。

世界を体験として受け取り、社会的世界におけるわれわれの思考や生活の習慣となり必要不可欠なものとなっている概念による時空間的な表象から離れ、私の体験諸領域をその諸層や諸関係において研究することによって、この体験諸領域の一つの注目すべき構造があると分かる。そしてこの体験諸領域は極めて複雑に、言語的、概念的把握が極めて困難である仕方でお互いに、双方向に関係し合っているのである。」(ASW Bd.V.2, pp.38-39)

このようにシュッツは「世界を体験として受け取る」ことで、社会的世界におけるわれわれの思考や生活の習慣において自明となっている「概念的思考」を取り出そうとする。またそれは、世界における意味の前所与性を明らかにするという、彼の現象学的態度の表明である。

2-2 名(詞)について

シュッツは次のように記す。「名詞」とは「ただ固有のものを指示する」のである、と。

すなわち名[詞]は、わたしたちがそのもの=対象を「名づける」という作用によって、対象の他の、類似のものとの比較が行われ、言語の概念の象徴的機能によって体験は類型化され、一般化される。シュッツは名[詞]を例にすることにより、私たちが「名」を使用することによってそれが概念範囲の規定を受容するあり方を問題にし、また、それらが個々独立した「体験」から私たちが「注意」を向けることにより変容する「意味措定」作用を決定づけるのである。

名[詞] Nomina とは？

- ・概念内容と概念範囲の確定
- ・注意の作用 ⇒ 諸体験の選択作用
- ・体験の質(原初的体験) = 単数形のもの = 複数形のもの
- ・体験(思っていること)の領域 / 認識(実際の事実)の領域
- ・言語体験のまとめり ⇒ 経験概念の創出

例えば、わたしたちが視覚(知覚)体験としての木を体験するとき、その1本の木という体験は、2本、あるいは複数の木々の知覚であっても、各々の体験の質はそれぞれ同じ「木」に対する体験(単数形の総和)であっても、まったく異なるものである。

“木 Baum ≠ 樹木 Bäume ≠ 森 Wald”

つまり、

あなたの存在 ⇒ 普遍的妥当性の要求

「私とあなたの経験が完全に等価値とされる場合」に

それらは「木」、「樹木」、「森」という概念範囲が規定される。

2-3 形容詞について

シュッツは形容詞を例に、文の意味における「私」の「意味措定」と「あなた」の「意味措定」を「私」が解釈するレベル、また、「あなた」の「意味措定」のレベルと、「あなた」が「私」の「意味措定」を解釈するレベルを区別する。

・付加語としての形容詞は、

体験に深く近づく言葉。思念した意味と措定した意味との差異を減ずる言葉。

聞き手の解釈に一つの図式を提供する言葉。直接の事物—体験にできるだけ適合する言葉。

・述語的用法としての形容詞は、

純粋に意味措定する言葉、すなわち純粋な客観的意味。

言葉が解釈によって提供される聞き手(=「あなた」とのみ関係し、

「あなた」によって措定された意味解釈を先取りする。

「バラ(が)ある」という命題について「赤い」という返事はいかに変化するか

付加語的用法(意味解釈作用の補充)

ペーテル「私の庭にはバラがある」

聞き手: パウル「君の庭にあるバラは何色？」

話し手: ペーテル「私の庭には赤いバラがある」

述語的用法(意味措定作用の補完)

ペーテル「私の庭にはバラがある」

聞き手: パウル「君の庭にあるバラは何色？」

話し手: ペーテル「私の庭にあるバラは赤い」

ペーテル(私)はパウル(あなた)に「私の庭にはバラがある」と話すとき、ペーテル(私)はパウル(あなた)に「バラ」と「意味措定」する。このペーテルのバラの「存在(ある)」と「赤色」は、もうすでにバラという言葉のうちに付加されて含まれている。というのもパウルはバラを体験し、またバラという言葉の意味も理解しているし、またパウルは、ペーテルによってそれを理解されることについてなんら疑いをもたないのである。

それゆえパウルは言葉のシンボル領域のうちに生き、ペーテルの体験を、まるで自分自身がそれを体験したかのように受け止めている。

しかしここで「パウルには、ペーテルを理解する課題、つまりペーテルの体験を自らにおいて再構築し、その体験において彼はペーテルの体験を解釈するという課題」がある。ここで聞き手のパウルは、イメージあるいは理念型「バラ」という客観的意味に対して、その意味に対する客観的態度を問いかけるのである。すなわち表現され、語られたペーテルの「現にあるこれ Dies da」の「バラ体験」を、パウルの「現にあるこれ」の「バラ体験」と一致しているのか、あるいは変様しているのかをお互いが確認するのである。

3.言語研究ノートにおけるシュッツの問題意識と言語的転換(1925年、1927年)

3-1. 言語という奇妙なもの

言語は予め措定されている関係性を繋ぐものであり、またそこには予め措定されている、分かり合う(了解)可能性が潜んでいる。シュッツはまずこの日常性の前提を「私-あなた」間で暴くのである。

「私は私にあなたから生じる同じ体験を、あなたの場合には私から生じる同じ諸体験として前提していること;私はあなたが私には理解可能と思ひ、また私と私の生があなたには理解されると思っていること;したがって私は、あなたによってたんに知覚されるばかりでなく、解釈されるチャンスをも有する行為に着手することができるし、また、あなたの運動をあなたの行為として、またそれを私が自分自身の行為を解釈するように私には把握できること。そしてまた、そこですでに私が作り出した空間的・時間的世界が解釈変更されたり、活気づけられたりするのである。」(ASW Bd.V.2, p.42)

このような関係性のうえでシュッツは名[詞]、形容[詞]というわずかながらの文法に目を向けて、「私とあなた」が発話し、言葉をやり取りすることから、行為する生の形式を発生的に構築することで交わされる意味機能の作用を明示している。

言語は日常(の発話、対話、会話など)からやってくるものであり、言語は日常体験から発生するのである。また、言語≠生得的・習慣的とは言えず、シュッツにとって言語はそれが話し手によって言い表され、聞き手にその言語の解釈を働きかけるということが、現実性のフリンジ(至高の現実)を保障するものである。それゆえ言語=ことばはそれに「独特の实在 Existenz」を与え、「もの=事物 Ding を、その話し手の持続から切り離し、もの=事物 Ding を、その聞き手の持続に解釈を委ねる」のものである。そして根源的には「あなた」という生の形式によって、空間的に与えられる。

「あなたの生の形式によって事物はその实在を受け、事物はどの持続からの分離を得る。しかしまさにあなたを通して、客観的意味はどの生からも「意味を帯びたもの sinnhaft」として新たに解釈される。第一の命題(定理)は行為する私の諸体験の再形成であり、第二の命題はあなた関係の領域に属する。二つの命題はそれらを最初に構成する概念的経験によって変形され、新たにこの生の形式において体験されるのである。しかしあなたと概念の間には言葉 Wort が立っている。(言葉は両者に関与しなければならないし、両者のあなたの機能は言葉の中で解決を見出さねばならない。)」(ASW Bd.V.2, p.60)

また言語は前-言語的な体験を時間的・空間的世界において、私に言語的に表現可能にさせる。それゆえ「言葉はそれ自体、すなわち客観的意味内容としては常に論理的には不正確であり、言葉はその独特な生を想像の対象として、主観的意味措定、そして再び主観的意味解釈の不明瞭な(二重の薄明かりの)中で営む」のである、とシュッツは言う。

言語は私にとってもあなたにとっても理解、解釈可能であり、体験可能にさせる通分可能なもので

あり、且つまた、私の私体験と、あなたのあなた体験が導く不一致性により、通約不可能なものを創出する。通訳に際し用いられる「シンボル」が言語なのである。ただし、このような言語が奇跡的 Wunder であるのは、この「シンボルによってシンボル化される体験が根本から変化する」からである。

一方でまた、「言語は人間を体験から引き離しはするが、不思議な仕方ですべてを結びつける」。

それゆえ言語=ことばは、「最初の脱神化であり、生の脱呪術化のための最初のチャンス」なのであるとシュッツは言うのである。

3-2.言語という第3領域のもの

シュッツは、「論理学はもっぱら「指標 Merkmal」を問題にし、本質の図式を立てその確定が質を確定することである」と記した。しかし彼にとっては言語領域において、どのような質が体験そのものと有意味的に結びついているのかということがもっぱら重要なテーマの一つなのであった。

言語はその奇妙さにより、言語領域に入り込んだ体験内容を変化させ、概念内容を規定する。ただし概念によってその体験内容を言語として記述するのではなく、まず、「私」と「あなた」の体験があり、それが言語によって表現される。それゆえシュッツは次の事を示すのである。事物の名という固有なもの(木、バラ)の言葉の不変性、頑なさは「概念的思惟の生の形式に属するか、あなた関係に属するのかどうか問題なのである」、と。

「体験のシンボル措定は、その関係はすべて生の諸形式によって破壊できない、私の私という統一の内部でもはや行われず、むしろ最初にあなたの本質を形成する、二つの生の経過のまさに交点で行われる。言葉の誕生以後は、もっぱら私だけに属し、そして、あなた、また、あなたとあなたにも属し得ないという体験はあり得ない。…したがって言語の奇跡は、言葉というシンボル作用によってシンボル化される体験が根本から変化するということ、すなわち必然的にあなた-関係のなかへ入れられてしまうということである。」(ASW Bd.V.2, p.43)

しかし、「実際にはあなたによる同一の事物体験は、私によるこの事物体験とは決して同じ *identisch* ではない」のである。しかし、その体験レベルで同一でありうるものを、概念レベルで調停づける作用が言語による名づけ(命名)である。

「「言葉」が世界の新たな形成を行い、この新たな形成の優位の陰にそれ以外のあらゆる体験はヴェールで覆われたように消え失せてしまう。言葉が世界を図式化し、他のどのような生の諸形式によっても接近できないやり方で世界を形成することによって、言葉がいまや世界を統治する。名づけによって事物とその性質、感情とその強さ、行為とその経過は、私の特有な体験の領域からまったく切り離される。言葉は直接あなた-領域に属しているので、それはもっぱら私とあなたに共通しているものだけを述べることができる。」(ASW Bd.V.2, p.43)

ただ言語は体験を概念化し、また、概念化された諸体験を体験そのもの自体や、その体験を受け取ったその人自体から引き離す作用を持つのである。その相補的な構成作用が、体験を繰り返し概念化するものであり、また「あなた」と了解(理解)可能にするものである。言語とはそのように利用される独自の領域を有している。

「名づけによって他の、類似の物との比較が行われ、言語の概念のシンボル機能によって体験は類型化され、一般化される。これは二重の関係において行われる。一方は、私の体験はあなたの体験に、またそれゆえ各人[の体験]に必然的に組み込まれることを通して。また他面では言語は、私の持続経過の内部においてもあなたの持続経過の内部においても、それぞれの<今そのように Jetzt und So>に同一のことを客観的に思念し、同一事物の体験には調整可能である。」(ASW Bd.V.2, p.61)

3-3. 言語という間主観的なもの

シュッツが言う、言語とは独特な第3の領域 Dritte Reiche であるということは、言語概念という形式論理的、定義論的な言語論的結論を有すものの対象化作用が、自-他間においても一律に客観的な効用しかもたらさないものとして受け継がれてしまうということを明らかにしている。この先行性の解明がシュッツの考察意図であった。体験という一つの領域が、そこでの他の私(あるいはあなた)の内在的体験やその領域に対して、言語に付与される主観的意味レベルから、言語に帯びられた生活世界の間主観性の水準で考察したのはシュッツの生の形式の思想の企図である。

「あなたによる意味措定の作用—私の私による意味解釈の作用—は、私の世界が経験する、最終的な豊富化である。が、しかしそれはそうではあるが、あなたや事物との、また世界 Welt や直接世界 Umwelt との私の全ての諸関係にとってはまさしく出発点でもある。」(ASW Bd.V.2, p.42)

ワグナーはシュッツの言語研究を受けて次の事を言明する。つまり「あなたの『言葉』はあなた関係のなかで決定的なメディアとなる。一方また、世界の3つのカテゴリー、すなわち、もの、行為、そしてあなたのどれとも一致しないが、それらすべて包含するのである」と。

というのも「言語」は、わたしたちの内的持続の統一、つまり非特定の質的多様性の流れから「そのもの自体」を切り離して使用される」がゆえにそれは「主観的意味の客観化」の契機なのである。

「あなたの生は私の生とはまったく別の経過を取ってきたのであるから—そうでなければあなたは私と同一であることになってしまうだろう(実情はそのようなことはありえない、あなたの生の経過は私の生の経過と反復的に用いられるイメージ Bild のままであるためには、ただ「交差する」だけであるのだから)—そうするとそれ自身おそらく同種の体験の、その時々々のシンボル創成も必然的に、私の今そのように対応するのは、ある異なる今とある異なるそのようにおいて生じている。ところで以上から判明することは、私の

体験の(主観的)意味(これを私はあなたの体験の主観的意味に対する客観的意味として実体化する)は、たしかに常に私によって思念された意味でありうるが、しかしそれはまたあなたによって理解された意味ではあり得ないということである。したがって、思念された意味と理解された意味の間の不一致、措定された意味と解釈された意味の間の不一致、あるいはマックス・ヴェーバーの基礎研究以来、残念なことに非常にしばしば誤解して言われているように、主観的意味と客観的意味の間の不一致が生じる。ここでは主観的意味に私の側で措定した意味が理解されるが、当のあなたにとってはすでに措定され、しかもいまや解釈すべきものとして対抗する客観的意味が理解される。」(ASW Bd.V.2, p.59)

言語研究ノートにおいてシュッツが「言語はもうすでに、あなたに含まれている生の形式の空間に据えられるのであるということを理解しなければならない」と述べるように、言語の発生(声)的根拠が、自己間関係、それも身近な他者から始まるということをもって、孤独(エゴロギカル)な私から、発話する私までの生の形式の階梯があることを示さなければならない。

たとえばフッサールによれば、表現 *Ausdruck* は意味 *Sinn* によって生命を与えられてはじめて有意味的な記号であった。すなわちそれは実在する対象への関係づけをもって意味機能を行行使し、また眼前される対象が名づけの志向によってその意味を有すことにより、単なる語の表現の空虚さが奪取され、志向対象への意味を充実する。(Husserl「論理学研究 *Logische Untersuchungen*」,第2巻第1章)

一方シュッツにおいて表現は、この認識よりさらに〈あなた〉*Du* との関係性の中で産出される産物や、経験としての対話を創出する場と、そこに根底づけられる持続体験そのものを発生根拠とすることによって、いわば社会的な、コミュニカティブな場=生活世界を把握している。

たとえば「社会的世界の意味構成」まで視点を進めれば、シュッツは言語の発生、さらに象徴性について以下のように記している。

「言語は、深く根ざしたその理由から一定の仕方で注目される体験を行動として実体化するのであり、その上こうした体験をそもそも行動とする眼差しの方向自体を、この他ならぬ行動にとっての意味として述定するのである。」(Schutz「社会的世界の意味構成」,第1章6節)

「他者が私たちによって措定された一定の記号を私たちの意識経過のためのそれとして理解することができるように、私たちもまた言語のような一定の記号を通じて、他者の一定の意識経過を理解することができる」(ibid. 第3章22節)

「表現という概念には意味 *Bedeutung* を持つということが属している」(Husserl「論理学研究」第2巻第2章15節)のであるなら、シュッツにとっては、社会的世界の意味を帯びた存在としての〈あなた〉によって言語は根源づけられる。また、「生の諸形式」から見れば、それを身近な〈あなた〉*Du*(時にはわたしたち *Wir*)の持続から受け取ることにより、言語はシンボルとして一般化され、私の体験を意味を帯びたものとして「話す *Reden*」という生の形式において、思われた意味を表出することができる。

それゆえシュッツにとっては、言葉・言語によって他者に働きかける *wirken* ことが表現であり、表現を

受容、表出することによって類型化する事によって、世界の構成を図ろうとしているのである。

それを決定づけるのは、何より原初的な社会性たる「〈あなた〉Du-関係」においてであり、それが自らの「生きる諸形式」を高低に循環させるのである。

〈※〉A.グールヴィッチは、1957年12月12日付のシュッツへの書簡内容のなかで、類型化の規定における経験の根源的位置の主張に際し、言語 = 一定のレリヴァンスの媒体という次のような言葉を残している。

「何が一定の類型化を規定するか、誰に対して対象は「同じ(pareils)」であるかと君が問うなら、社会的直接世界とそのレリヴァンスに立ち入らなければなりません。僕の世界では一定のレリヴァンス（君(=シュッツ)の意味での)が支配しており、したがって物事はこのやり方で類型化されます。これらの類型化を僕は両親等から受け継いできました、受け継ぎの媒体はとりわけ言語です（全てこのことは君から学びました）。」

4.図：言語の働き Spracharbeit としての言語研究ノート Spracharbeit

